曲目紹介

●スメタナ　　弦楽四重奏曲　第２番　ニ短調

　スメタナ（Bedřich Smetana　１８２４－１８８４）はチェコの作曲家。

第２番は１８８３年に完成。１８８４年１月に初演されましたが、スメタナは病気が重くなり立ち会えず、５月には亡くなっています。

難解な内容の作品で、スメタナ自身、第１楽章作曲時に友人に宛てた手紙で、

　第１楽章の構成については、自分で大いに疑問を持っています。大変特異な形式のもので、それを把握することは難しい。楽章全体に精神錯乱の感じがいきわたり、演奏者にとってはすこぶる扱いにくいものになりそうです。

と記しています。

また別のところでは、スメタナ自身が

　第２番は第１番が終わったところから始まった続編のようなものだ

と説明しているということなので、第１番と同様に自叙伝的な意味を持った作品なのでしょう。

第１楽章	Allegro	ニ短調	３／４拍子	
第２楽章	Allegro　Moderato	ホ短調	２／４拍子	
第３楽章	Allegro	ハ長調	４／４拍子	切れずに第４楽章に続きます。
第４楽章	Prest	ニ短調	６／８拍子	

演奏時間　約２０分

●ドボルジャーク　弦楽四重奏曲　第１２番　ヘ長調　Op.96　「アメリカ」

　ドボルジャーク（Antonín Leopold Dvořák　１８４１－１９０４）はチェコの作曲家。

チェコ語の“Dvořák”のカタカナ表記は定まっておらず

　ドヴォルジャーク、ドヴォルザーク、ドボルザーク、ドヴォルシャック、
　ドボルザーク

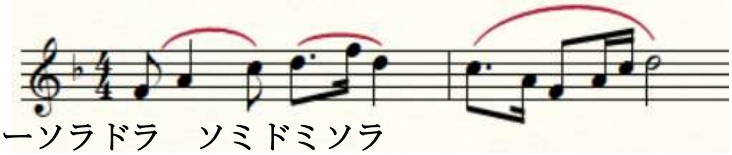
など、さまざまです。

　ドボルジャークの弦楽四重奏曲は１４曲ありますが、１８９２年から１８９５年までのニューヨーク・ナショナル音楽院の院長としてのアメリカ滞在の間に書かれた第１２番「アメリカ」が際立って有名です。（このアメリカ滞在中には交響曲第９番「新世界より」、チェロ協奏曲、テデウムなどの名作が書かれています。）

「アメリカ」の中には、ドボルジャークがアメリカで聞いた黒人霊歌やアメリカ先住民の歌から着想を得たと言われている旋律が多数登場します。

第１楽章　Allegro ma non troppo　　へ長調　２／４拍子

冒頭のヴィオラによる旋律

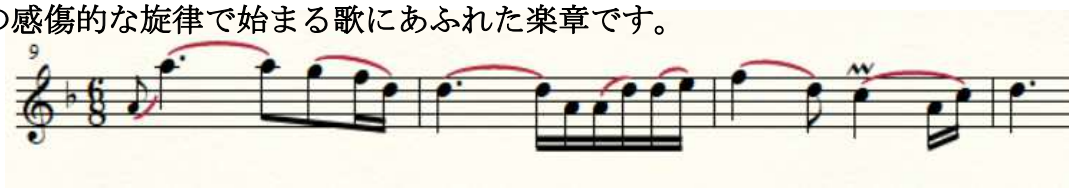


へ長調の音階で書くと　ドミーソラドラ　ソミドミソラ

となり、オクターブの７つの音の中のファとシが一度も登場しない“五音音階”となっています。この音階はアメリカ、ボヘニア（チェコの一部）をはじめ、世界各地の民謡に登場するので、聴いただけでなつかしさを感じさせるものです。もちろん、日本のわらべ歌なども同じです。

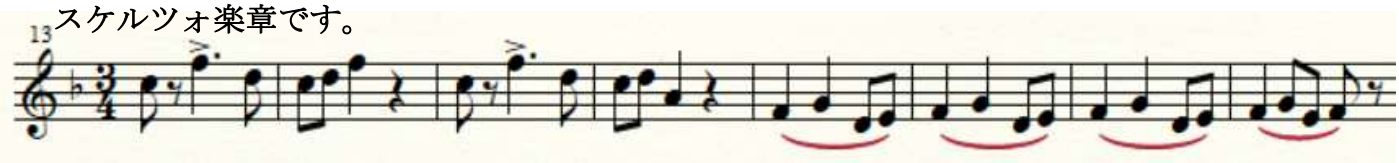
第２楽章　Lento　　ニ短調　６／８拍子

黒人霊歌風の感傷的な旋律で始まる歌にあふれた楽章です。



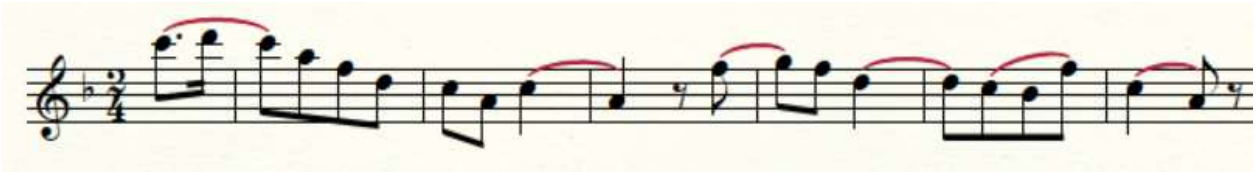
第３楽章　Molto vivace　　へ長調　３／４拍子

スケルツォ楽章です。



第４楽章　Finale: Vivace ma non troppo　へ長調　２／４拍子

自由なロンド形式、次のロンド主題が繰り返し戻ってきます。



演奏時間　約２２分

休憩

●スメタナ　　弦楽四重奏曲　第１番　ホ短調　「我が生涯より」

スメタナは１８７４年の７月ころ（５０歳）から耳の不調が生じ、８月には幻聴と激しい耳鳴りに悩まされ、秋には完全に耳が聞こえなくなってしまいました。そのため、公的な地位からは引退し、作曲に専念するようになりました。

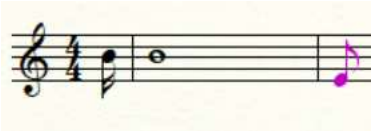
この曲はスメタナの音楽的生涯を表す自叙伝的な性格を持っています。各楽章にはスメタナ自身の付けた標題があります。（友人にあてた手紙の中で説明しています。　『』内の文章）

１８７９年３月に、スメタナの友人の家で初演された際にヴィオラ奏者を務めたのがドヴォルジャークでした。

第１楽章　Allegro vivo appassionato　　ホ短調　　４／４拍子

『私の青年時代の強い芸術愛好、ロマンティックな雰囲気、自分ではよく分からない何かへのいい表しがたいあこがれ、それが将来の不幸な知らせをも描いている』

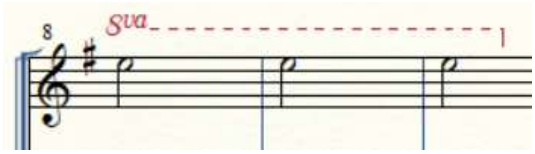
不幸という言葉の後に右の楽譜が引用されています。



次に、

『終楽章での長く伸ばされる音は、このような開始に由来するものである』

として、右の楽譜が引用されています。



※8va は“オクターブ上の音を演奏せよ”の指示

第２楽章　Allegro moderato　　ヘ長調　　２／４拍子

『ポルカ風の楽章で、私の心に楽しかった青春の日々をよみがえらせる。そのころ私は、ダンス音楽を作曲し、いたるところで熱烈なダンス狂として知られていた』

第３楽章　Largo　Sostenuto　　変イ長調　　６／８拍子

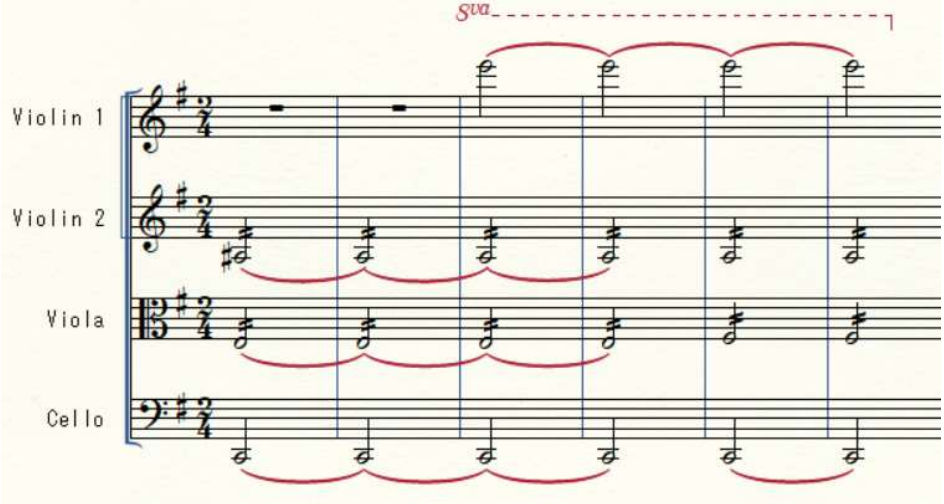
『このクァルテットをひかれた方々のご意見では、演奏不能という楽章であるが、後に私の忠実な妻となった少女との初恋の幸福な思い出を私によみがえらせてくれる』

(妻となる女性とは１８４９年に結婚しましたが、１８５９年に亡くなってしまいました)

第４楽章　Vivace　　ホ短調―ホ長調　２／４拍子―４／４拍子

『民族的な要素を音楽で扱う道を見出しせっかく仕事が軌道に乗って喜んでいるところに失聴というカタストロフィーが襲いかかって、挫折させられるまでを描く。それと、悲惨な先の見通しや、一抹の回復への希望も描いている。だが、それにしても、それまでの私の先行きが楽しみだった経歴を思い出すと、やる方ない無念さが胸にこみあげてくる』

民族的な要素の主題を中心に快調に曲が進行しますが、再現部の終わりで突然全楽器が休止し、不吉なトレモロに変わって第１ヴァイオリンが失聴の始まりを告げる耳鳴りの音を伸ばします。



演奏時間　約３０分